四年　『鹿踊（ししおどり）・剣舞（けんばい）の復活（ふっかつ）』

戦前から途絶えていた鹿踊・剣舞を復活させようとした人々の願いと努力そして地域の人々の喜びを通して郷土愛について考える。
＊当時の心境や練習の様子，鹿踊・剣舞に対する思いなどを，保存会の方に直接お話ししていただく。

今から，およそ六十年ほど前(昭和二十二年)のことです。
「わかい人たちで，鹿踊・剣舞をおどってくれないか。」
栄吉さんは，浩平じいさんからたのまれました。そのころ福岡では，二十年近くも鹿踊・剣舞がおどられていませんでした。
「昔はな，神社や秋まつりでよくおどったもんだ。おと市よりやわかい人たちがたくさん集まってな。みんなうれしそうな顔ではくしゅしてくれたもんだ。福岡だけじゃないさ。どこへ行っておどっても，その土地の人みんなが喜んでくれたものだ。」
浩平じいさんはさびしそうな顔で言いました。
「福岡の鹿踊・剣舞は，三百年の伝統がある。伊達のおとの様も踊りのすばらしさに感げきしてな。踊りの幕をごほうびにくださったくらいじゃ。このままでは，鹿踊・剣舞が消えてしまう。わたしら年よりが元気なうちなら，まだ教えられる。今なら間に合う。栄吉さんたちわかい人でぜひおどってくれないか。」
栄吉さんは，浩平じいさんのこんな真けんな顔を見たのは初めてでした。

そこで，次の日。さっそく村のわか者たちが集まり，話し合うことにしました。みんな鹿踊・剣舞を見たことがない人ばかりでした。
「きょうは，浩平じいさんから言われた鹿踊・剣舞のことについて相談する。」
「おれも聞いてびっくりしたんだが，本当におどるのか。」
「だれが教えてくれるんだ。おれたち，一度も見たことないんだぞ。」
「おどりは，村の年よりたちが教えてくれるらしいが・・・。」
「見よう見まねで，本当におどれるようになるのかなあ。」
そのころは，戦争がようやく終わったばかり。人々はあれはてた田畑をもとどおりにするのにいっしょうけんめいでした。
「おれは田んぼがいそがしい。おどりなんかやるひまはないぞ。」
「田んぼ仕事が終わった後の練習じゃ，つかれて動くのもいやだよ。」
「それに，どこで練習するんだよ。道具もいたみがひどくて使えないというではないか。」
「そうだ。そんなものおどって何になるんだ。一円にもならない。」

「でもなあ。うちのばあさん，死ぬ前にもう一度見たいって・・・。」
「うちのじいさんも　このごろの秋まつりはさびしくなったって。」
「むかしから大切に守ってきたおどりだ。何とかしたいとは思うが，むずかしそうだなあ。
　本当におれたちでおどれるのだろうか。」
とうとう，みんなはだまりこんでしまいました。

しばらくして，
「鹿踊・剣舞は福岡の宝だって聞いたことがある。浩平じいさんが，あんな真剣な顔をしておれたちにたのむくらいだ。おれは，やってみようと思う。」
栄吉さんが，言いました。すると，
「そうだな。三百年も前から　おどられているんだものなあ。」
「おれたちで何とかしないと，このままなくなってしまう。」
「そうだ。ここでおれたちがやらないと・・・。」
「きっと，福岡のみんなも喜んでくれるだろう。」
「力を合わせて，やってみるか。」
「ようし，決まりだな。みんなでやってみよう。」
栄吉さんたちは，何も知らない鹿踊・剣舞をおどってみることにしました。

そして，二年後(昭和二十四年)
やっと発表会ができるようになりました。
朝から泉の鴇田さんの家に集まり，いしょうを着けました。
「せーの。」
道だいこがひびきます。
「ドンドコ，ドンドコ」
村の人たちも　道の両側にならんで　手をたたいてくれています。浩平じいさんたちもうれしそうです。小学校までの道のりを晴れがましい気持ちで歩きました。
いよいよ，鹿踊・剣舞の復活です。

＊　道だいこ
鹿踊・剣舞がやって来たことを知らせる
おはやしのたいこ

資料作成　　仙台市立福岡小学校